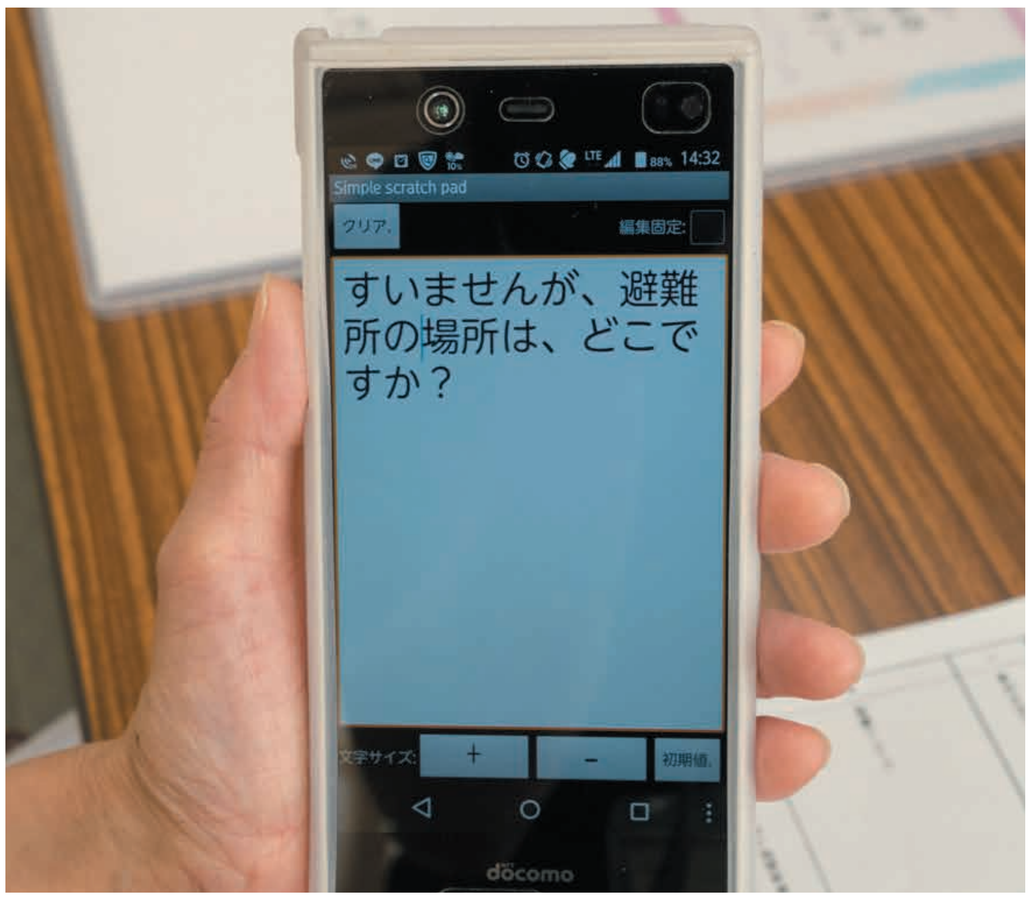
3.11 ソレカラ

～障害者・福祉職員の「あの日」と「ソレカラ」～

◎松田千絵さん（女性／当時40代／聴覚障害）

遠慮したり、恥ずかしがったりしないで「私は聞こえないです！」と主張することが大切。



― スマートフォンでコミュニケーションを取る ―

― お寺から見た当時の住まい ―

自宅　自宅に戻るものの、経済面・精神面で「前と同じ生活」に戻ることが困難に。

震災後、お寺に避難していた松田さんは、ガスと電気の復旧を機に、地震・津波の被害を逃れた自宅に戻ることにしました。水道は通っていなかったので、自衛隊の給水やボランティアによる炊き出しなど、ご近所の方から筆談や身振りで情報を教えてもらいました。水道が復旧したのは地震から2ヵ月後、ようやく当面の生活に困ることはなくなりました。しかし、勤めていた工場が被災して会社から解雇されたり、再び地震が来ることへの恐怖を感じたりするなど、あらゆる面で「前と同じ生活」には、なかなか戻れなかったのです。

引っ越し　再出発するために、生活の拠点を仙台へ。ようやく安堵の日々を取り戻す。

震災から2年が経ち、娘が中学校を卒業する時、松田さんは住み慣れた気仙沼を離れ、仙台に引っ越す決意を固めました。理由は、松田さんが新しい仕事を探そうと思ったこと、そして、復興の道半ばの街並を見ていると、あの日のことが思い出されて辛い気持ちがよみがえることから解放されるためです。仙台に居を構えた松田さんと娘は、精神的にずいぶん落ち着くことができました。今、松田さんは「ようやく復活できた」と、心から安堵する日々を送っています。

助言　緊急時は、当事者も支援者も、少しだけ機転を利かせて交流することが大切。

今回の震災での経験を経て、松田さんは「緊急時に障害者が自ら発信すること」の大切さを知ることができた、といいます。「聴覚障害者は、見た目だけでは障害があるのかが分かりません。だから、自分が聞こえないんだということを周囲に向けて表す必要があると思うんです。苦しい表情や不安な表情じゃなく、ニコッとしてね。“よろしくお願いします”といえば、周囲の人も“いいよいいよ”って言って、理解してくださると思います。

そして支援してくださる方は、最初に「聞こえない人はいますか？」「障害のある人はいますか？」など、紙に書いて確認してもらえれば、その後の対応が楽だと思います。周囲にいる全員が障害者の情報を共有できた上でサポートしてもらえる形だといいなと思います」。

また、聴覚障害者とのコミュニケーションの取り方は、実は多彩だと話します。手話や筆談ができなくても、手のひらに文字を書く、スマートフォンに文字を入力する、表情や身振りで知らせる、手や服を持って一緒に行動するといった手段も有効で、自らも普段からそうしたコミュニケーションを駆使して周囲との交流を続けているそうです。

昨年の熊本地震で、聴覚障害者が支援からもれてしまったというニュースを聞き、心を痛めている松田さん。同じ障害を持つ立場として、自らの経験が、今後聴覚障害者が被災した時に何らかの形で役立ってくれれば、と考えています。